

OMC事務局 〒560-0085 豊中市上新田4-16-1-33 合原 一夫 TEL06-6833-9227
 広報編集局 〒573-1171 枚方市三栗1-18-20 前田 茂夫 TEL072-850-5781

<http://www.ne.jp/asahi/smaeda/12/>

平成15年8月(2003年) No. 452

第43回OMC映像フェスティバル プログラム決まる

来る10月4日(第1土曜)午後1時より、阿倍野市民学習センターで開催される「第43回OMC映像フェスティバル」の作品が、このほど行われた世話役会で決定されました(次頁)。今年もいい作品が集まり、きっと観客の皆さんに良い評価が得られるものと確信しております。

先だってお亡くなりになりました安居良枝さんの遺作「被災犬フラン」も上映いたします。これは東京アマチュア映像祭全国ビデオ映像コンテストに上位入賞された立派な作品です。生前精力的に作品をおつくりになっていた故・良枝さんの、OMC映像フェスティバル最後の出品作品となります。改めて感無量なるものがあります。

このほか新人の山本さんの「アラビア海の漁民達」も候補に上がっていますが、ご旅行中なのか連絡がつかず、残念ですが上映できません。できれば大阪アマチュア映像祭へ出品して頂くよう話し合っ決めてたいと考えております。

また、関さんも今年は作品数が少なく、OMCの方は辞退され、大阪アマチュア映像祭の方へ「レクイエムⅡ」を出品されることになりました。

大阪アマチュア映像祭は11月16日(日曜)

第7回大阪アマチュア映像祭は、今年も大阪市立中央図書館との共催により、11月16日(日曜日)午後、大阪市立中央図書館にて開催されることが決まりました。各クラブの出品作およびプログラムは9月7日(日)の連盟会議で決定されます。

8月例会のお知らせ

8月例会は、第4土曜23日18時より、大阪駅前第2ビル5階大阪市立総合学習センターにて開催します。残暑厳しい時ですが会場は冷房が効いていて一寸した避暑気分です。どうぞ作品もお持ちになってお集まりください。お待ちしております。

第43回OMC映像フェスティバル プログラム

1)今宮戎	那須典彦	6分
2)大山名水紀行	森口吉正	9分
3)往年の祇園祭	増池 茂	8分
4)YOSAKOI 2002	江村一郎	8分
5)津野山神楽	河合源七郎	10分
6)竹の精霊	玉井 ひとし	6分
7)仏画	渡辺雄史	9分
8)蘇ったマメタンク	前田茂夫	12分
9)日野祭 (撮影会作品)	藤原純三	9分
休憩		
10)被災犬フラン	故・安居良枝	9分
11)じゃじゃ馬ならし	安居利次	8分
12)那智の火祭	吉岡貞夫	8分
13)信仰に生きる	西村光雄	11分
14)彫る	有村 博	15分
15)兵馬俑	上総修一郎	4分
16)有明海苔に生きる	合原一夫	16分
以上		

■出品者は8月例会に作品テープと出品料を用意してください

作品テープは藤原さんへ、出品料 7,000円は会計の森さんへお渡しくださるようお願いいたします。

■東京アマチュア映像祭・全国コンテスト 安居夫妻がそろって入賞

入賞 被災犬フラン 安居良枝
入賞 じゃじゃ馬ならし 安居利次
まことにお目出度うございます。

レベルの高い東京映像祭全国ビデオ映像コンテストに、毎年のように入賞されている夫妻の作品は、やはり第三者からみて立派な力量が認められたということで、今後、良枝さんの作品が見られないと思うと残念でなりません。あの、花開く印象的なクレジットタイトルは、いつまでも忘れることの出来ない画面となることでしょう。

■予告

11月例会は、第4土曜日が大阪市立総合学習センター行事のため、貸室がありませんので止むを得ず第5土曜29日になります。よろしく申し上げます。なお12月は恒例により第3土曜に会場申込みをしたいと思っております。

7月例会レポート

例会に先立ち、2時より世話役会を行い、第43回OMC映像フェスティバルに出品する作品選定と上映順を決めました。OMCニュースの講評を参考にし、本人の意向も確かめてからの選定作業は結構大変な作業であった。山本さんの作品はどれも題材が珍しい貴重なものだけにプログラムに載せたかったが、連絡がつかずに断念、かわりに大阪アマチュア映像祭へ推薦することにした。例会日の26日は長雨続きだった後の梅雨明け宣言が行われた日。久しぶりの青空に気分がよかったが、やはり夏、暑い日となった。しかし例会場は肌寒いくらいの冷房が効いていた。

7月例会の出席者は23名、作品は10本でゆったりとした充実した例会であった。司会は安居氏、書記、関氏、デッキ操作は河合、増池の両氏、受付は奥、渡辺両氏の担当で会を進行させた。

■出席者 (敬称略)

今井、江村、奥、金子、上総、河合、関、合原、進藤、那須、西村、中尾、華岡、藤原、宮崎、前田、増池、森下、森口、安居、森、吉岡、渡辺の23氏。

■上映作品 (今月の講評は関世話役です。)

1. 蓮の季 (とき)

6分30秒 増池 茂さん

タイトルのあとに「うつし世に古代をつなぐ蓮の華」と洒落た俳句がつく。どこの地域かは不明だが龍雲禪寺という寺の境内で行なわれたこの時期ならではの趣向。蓮の葉に酒を注ぎ、中心にあけた穴から葉の軸を通して杯に満たす、いわゆる形を変えた“象鼻杯”がこの作品のメイン。むくげ、蓮の花など、ど肝を抜く超アップは作者独特の映像感覚、ちょっと他に真似はできない。だが最良の組み立て方法を見いだせないのか、それとも行き詰まったか、半端な構成が全体の評価を見殺しにした。なんとしても惜しい作品。

2. 祭のふるさと

10分30秒 進藤信男さん

5月の撮影会作品。近江商人発祥地の紹介から日野祭へ滑らかに移行させた編集技

術はおみごと。内容にも説得力があり、帰りの時間を他人より遅らせて撮った成果が出ていると思う。コンテストに出品がなかったのは残念。

3. 信仰に生きる (改訂編)

11分40秒 西村光雄さん

西村さんといえばネパール。回を重ねるごとに作品に重みが増し、最近では民衆の心の内面にまで迫っている。

ヒンズー教を国教とするこの国で仏教も仲良く共存するのは元の思想が同じだからだ。しかしここでは釈迦は9番目にランクされ、意外とその地位が低いを知った。最高位のシバ神は女神だが、仏教ではそれが不動明王に変化するということから面白い。民衆と信仰の価値観を追求するにつれ、それは無限と言えるほど奥が深いのだ。作者が言いたいのもその事ではなかったか。

虫も殺さない仏教の教えに対しヒンズーでは生贄を神に捧げる。輪廻転生を信じる彼らは墓を持たず、遺体は衆目の前で焼いて川に撒く。ここでは日常のひと駒にすぎないが私たちには思わず目を覆いたくなる場面だ。改訂編のこの作品はそのあたりを少々緩和したと作者は言うが、やはり衝撃的印象はたいして変らない。とは言え、これ以上表現描写に手を加えるのも却ってマイナス。作品的にはもはや画竜点睛の域に達していると思えるからだ。

4. 上杉謙信 武てい式

9分54秒 吉岡貞夫さん

米沢はかつて上杉家の城下町、謙信はいまも米沢市民の誇りだそう。城跡に建てられた上杉神社で毎年、上杉謙信の出陣を模したイベントが行なわれている。

「武てい式」とは各地の武将たちが首領とする謙信の前に集まり毘沙門天に必勝を祈願する出陣の儀式。戦国時代さながらに鎧兜を纏った武将たちが次々に現れ、謙信に頭を下げて忠誠を誓う。鉄砲隊の一斉射撃のあと五沾水の儀、賜旗の儀を経て全員で関の声をあげ、いざ川中島へ。というところで作品は終る。イベントすべてが夜間撮影だが、照明が行き渡って映像も鮮明で、鉄砲隊の射撃は迫力があつた。ロングが多いのはカメラを簡単に移動できないのだから。

う。

5. 蘇ったマメタンク

13分40秒 前田茂夫さん

マメタンクとは2軸の動輪をもつB20型SLの愛称。かつて鹿児島機関区で入れ替え用として働いていた10号機が現役を退いたあと、長いあいだ梅小路機関庫に放置されていたのを、分解整備に一般からボランティアを募り、みごと復元させた貴重な記録。大人子供あわせて30人の素人整備士たちが、錆を落とし、部品を磨き、塗装を施す。SL大好き人間の集りだから作業も和気藹々、とくに小学生にとってSLの動く仕組みも学習できて生涯忘れられない素晴らしい体験だったに違いない。

作者もボランティアの一員に登録されたかどうかは判らないが、人々の応募の光景からSLが完成して火入れ式、そして試走まで、じつに詳細に撮っている事に驚いた。ほとんど毎日のように出向いて行かれたのだろう。その努力の甲斐あって、たいへん完成度の高い作品になっている。しかし、またか、更にまたか、と感じた延べ7人もインタビューはちょっと多すぎたのではなかったか。

6. 有明海苔に生きる

15分46秒 合原一夫さん

「黒いはずの海苔が…、なぜだ」。アップの映像は、黄色に変色した海苔が網にびっしり張り着いていた。色落ちした海苔は値付けどころか入札の対象にもならないという。

最大6メートルの干満差がある有明海は、かつてはムツゴロウやシオマネキなどたくさんの生物が棲む豊かな海だったが、公共の名のもとに埋め立てや干拓が各地で進められた結果その生態系に異変が起きているのだ。自然の微妙なバランスが崩れ、プランクトンの異常発生が海苔の色落ちの原因だそうで、事態を憂慮した漁民たちは船団を列ねて干拓工事をする対岸の諫早湾へ抗議に押し掛けた。漁民の声は果たして関係者に届いたのか。汚れた海を浄化するというEM菌を混ぜた泥団子を漁業組合がつくり、海に投げ入れた。各個では、水槽に牡蠣殻を並べて胞子の種を撒き、それが

定着するまで水温や水質管理に神経を使う。胞子が定着するとその牡蠣殻を一枚づつ袋に入れ、等間隔で網にくくりつけ朝のまだ暗いうちから一家総出で海に下ろしていく。海に張った海苔網は汚れが付かないようシャワーで洗う。寒い冬のあいだもそれは一日も欠かせないつらい作業。私は海に網さえ張っておけば、あとは自然に海苔が付着し育っていくものと思っていたが大きな間違いだった。海苔の養殖は信じられないほどの手間と労力が必要なのだ。

作者は主人公、東さん夫婦のご苦労を、早朝、昼間、夜間を問わず冷めた目で追っていく。そして一回目の収穫が終った年明け、再び怖れていた色落ちが始まった。「今年はまだ諦めた」と、網を撤収する東さん。「これしか能がないので頑張るだけ」淋しそうに海を眺める夫婦に“来年こそは黒い海苔を”と作者の乾いた言葉が重なっていた。

7. みほとけの画と写経展

5分50秒 渡辺雄史さん

4月の作品「仏画」の主人公、西浦道頭さんの個展の様子を記録したもの。メディアムとロング主体だが、西浦さんの顔、それに筆のタッチが分かるほどの画のアップもほしかった。挨拶状とそれを棒読みした西浦さんの声があったが、それはご本人の希望か、それとも作者の考えか。もし後者ならここは省いてもかまわない。来客に対応する西浦さんの姿とその説明で充分。

8. 兵馬備

3分57秒 上総修一郎さん

兵馬備は秦の始皇帝が即位と同時に造らせた自分の墓、つまり始皇帝陵を警護する守陵部隊だそうだ。1974年に農民が偶然発見して以来いままなお発掘が続いている。作者は文民官らしき備もあるから「この当時にもシビリアンコントロールが働いていたらしい」というご意見だが、始皇帝はたった10年で6国を平定し、あの匈奴も退けた強大な軍隊を率いる独裁者だ。とは私の考えで、そこが作者と違う。鎧甲を着用してないから文民と見たかもしれないが、あれは戦袍と称するレッキとした戦闘服。と、兵馬備博物館主任の楊正卿さんが

書いていた。

ひと昔まえに見学したとき8ミリを構えたとたん監視人に制止されたが、いまは撮影も自由になったのか。

9. 御堂筋パレード

8分30秒 那須典彦さん

95年のパレード風景。浜村淳の実況ナレがずっと続いていたから大部分が市役所付近で撮ったものだろう。雨模様の悪条件だが、腕章（どこで手に入れた？）の威力か、道路の中央で撮れたのがよかった。本番は毎年だれかが見せてくれるが、パレードの出発前と終ったあとの連中はどうしているのだろうか、まだ見たことがない。

10. 紫陽花

4分15秒 江村一郎さん

天に登るような石段の両脇に紫陽花の群生。銀色に輝く手摺りが縦一直線で画面中央に配し、串状の石段と両側の紫陽花の緑をシンメトリックに切り取った構図はまさに自然と人工の造形美だ。ただ花を見せるのではなく小さな生き物も意識的に配慮する。それらをアップで貼りあわせてモニタージュした作者独特の構成は、単調になりがちな対象を、もののみごとに映像化させている。場所を示すテロップ「当麻町・・・ふるさと公園」がバックに溶けてよく判らなかつた。

良枝さんへの追悼文

◆良枝さんの思い出

吉岡貞夫

6月3日夕方6時過ぎ、電話の呼び出し音で受話器をとると、有村さんからの電話でした。もしかして！の予感が……「実は今日 安居良枝さんがお亡くなりになりました。」の悲報の連絡をいただきました。やっぱり手術は成功しなかつたのか、一瞬間の中が真っ白になりました。

安居さんご夫婦と親しく言葉を交わすようになったのは、四国高知のよさこい祭りの撮影の帰り、夜行バスで安居さんのご主人と同席になり、ビデオ談義が弾み奥さんとの出合から、結婚そしてビデオに熱中さ

れるまでの話を詳しく聞きました。後日この話を奥さんにしてから例会前にはよく雑談を交わすようになりました。最近の話題をひとつ、奈良撮影会の出来事より。

「ねえー ちょっと ちょっと話を聞いて。この前ね……この様なことがあったの……奈良へ撮影会へ行ったでしょう。その時にね、主人にちょっとカメラを預けたの、そしたら運悪くどうやらカメラを落としたらしいわ。そのあと何か調子が悪くてね、修理に出して元へ戻ったんだけど、カメラは絶対自分の手から離れたらダメよ。……どう思う……そうでしょう。」といった元気な声でお話を聞いたことが今でも脳裏に残っています。

例会場では、安居夫妻の座る場所が決まっています。5月10日の例会（OVC）のこと。奥さんの姿が見えないので、ご主人に聞きますと、「手術前に体力を付けるために病院で療養してしるんですわ」と話されていました。5月29日 OVC 課題コンテストの日、安居夫妻の姿が見えません、話しによると、作品は既に完成しているようですが出品されないことはやはり経過が思わしくないのでは、と心配していた矢先に悲報を聞きました、悲しい出来事です。

遺作となりましたコンテスト課題作品「幸せをかみしめて」は、6月 OVC 例会場で上映されました。内容はご自分が歩んでこられた足跡を立派にビデオ作品に描かれておられます。この作品を完成させた時、もしかしてご自分の運命を予測されていたのかも知れません。人生の最後に何かをやり遂げて生きがいに満足、そして天国に旅立たれたことと思いますが、あまりにも早すぎた人生に残念でなりません。天国からじっとビデオ例会を見ておられることと思います。

「チョット ちょっと ビデオって本当に楽しくて良いものですね。」と今も声が聞こえてくるように思います。ご冥福をお祈りします。

◆フラッシュバック

文・岡本至弘

このコーナーは、毎号書けませんが、紙面がゆるしていただける範囲で、ホットかクールかわかりませんが、声を投稿させていただきます。

まずは、先日OMCきっての女性作家、安居良枝さんの突然の訃報に接し心より哀悼の意を申し上げます。

4月の例会にお会したときは、何のご様子もお見受けしませんでしたのに、信じられません。「ささやきの小道」が最後の作品になりました。毎月見せていただくのが楽しみでしたが残念です。

良枝さんの作品を初めて拝見させていただいたのは、1996年6月8日、スタジオエイトの例会でした。ご本人はこられていませんでしたが、平野の松村さんがもってこられていたと思います。作品名は「閃光」というタイトルで花火を撮られたものでした。花火だけでこれだけの作品を作れるとはすごい作家だと思いました。1996年12月には「通りぬけ」、1997年2月には「夜のネオン術」等つづけて見せていただきました。以来、OMCに入会されて、数多くの作品を発表され、女性の繊細な感覚でつくられた作品には、深い感銘を覚えました。特に1999年に、私が発案しましたOMC熊野古道撮影会作品「魅いられて」は、女性の立場から平安の女性に思いを馳せたすばらしい作品でした。私から企画賞をいただいていた次第です。

もう良枝作品が見られないのは大変寂しい思いがしますが、天国で安らかに眠りくださいとはいいません。どしどし作品をお作りになっていただきたいと思います。そして、この世に送りかえていただけたらと思います。（合掌）

追記 5月のOMC日野まつり撮影会は、無事に終了されました。私が発案させていただき、また下見させていただいたにもかかわらず、私の都合（父の死去）で参加できませんでした。深くお詫び申し上げます。すばらしい作品有り難うございました。

◆お詫びと訂正

先月号の西村さん追悼文「安居良枝さんを偲んで」の一部に誤植がありましたのでお詫びして訂正いたします。最後から17行目。

(正しい文章)

訃報をお聞きした夜、安居さんのHP(夫婦でビデオ)で「ささやきの小道」を見せて戴きましたが、良枝さんのナレーションが始まると熱いものがこみ上げて来てどうしても終わりまで見ることが出来ませんでした。

(誤植の文章)

訃報をお聞きした夜、安居さんのHP(夫婦でビデオ)で「ささやきの小道」を見せて戴きましたが、良枝さんのナレーションが始まると熱いものがこみ上げて来てどうしても終わったものも終わりまで見ることが出来ませんでした。

全国コンテストで

腕だめし してみませんか

全国各地から、ビデオ映像コンテストの案内がきています。落ちて元々…、あなたもひとつ腕だめしのつもりで応募してみませんか。最新作とは限りません。今までの作品で一寸自信があるというもの、ありませんか。応募資料は事務局にあります。

1. なごや・まちコミ映像祭”2003”

まちづくりの共感を呼び、人々の理解と参加を促進するもの。応募締切は11月30日7分以内。グランプリ30万ほか。

2. とよたビデオコンテスト

応募締切11月16日、3分以上7分以内、テーマ：自由部門、クルマをテーマの部門。

3. 玄光社・全日本映像コンクール

締切9月末日、15分以内、ビデオサロン8月号参照のこと。

4. 東京ビデオフェスティバル2004

テーマは自由、締切は10月10日、ビデオ大賞50万円。ビデオサロン8月号参照。

5. 愛媛ビデオフェスティバル2003

9月末締切、テーマは「友達」および、自由部門。審査員、小林はくどう氏ほか。

6. 第6回名古屋ビデオコンテスト

締切：平成16年2月末日。10分以内。テーマは自由。ビデオサロン8月号参照。

7. 第3回彩の国埼玉全国映像コンテスト
応募期間：9月1日～9月30日、12分以内。テーマは自由。応募料2,000円必要。ビデオサロン8月号参照のこと。

8. ユーリードショートムービーコンテスト
9月末締切、3分以内。

9. アストロデザインムービーコンテスト
9月15日締切。

10. 丹波篠山ビデオ大賞コンテスト
締切11月28日、10分以内。

プロジェクトXに想う

合原一夫

NHKの人気番組プロジェクトXは毎週火曜日の夜9時15分からの45分間のドキュメンタリー番組である。私は、中島みゆきが歌うテーマソング「星空の下に」が流れ出すと、テレビの前に釘付けになる。

この番組は過去にさまざまな未知の分野を苦勞して克服し乗り越えてきた無名の人々を描いたドキュメンタリーである。物語は過去のものだけに、映像資料が十分ではなく、スチール写真や後でつくったドラマをうまく使って一つのストーリーに仕立ててある。そして最後に当時の主役たちがスタジオに招かれてインタビューを受けるが、皆感無量のおももちで当時を振り返るシーンが感動的である。

私達が作品づくりで参考になるのは、まずナレーションが簡潔で判り易いということ。ポツンポツンと短いのだ。これに対して評論家の中には「文章に味がない」とい評もあるようだが、判り易い、簡潔にというのは大変勉強になる。

次に画づくりに技巧をこらさず、カットつなぎを主にしていること。最近ノンリニアで画面転換も大変凝ったものが使われる傾向にあるが、特にドキュメンタリー作品では、カットつなぎが基本であることを思い知らされる。そして決してうまくいった事だけでなく、失敗の連続、苦勞の連続を経て成功に至るといった話の組立て方が勉強になるが、それが私達には甚だ難しい。